

県民図書室通信

発行：一般財団法人 神奈川県高校教育会館 県民図書室 横浜市西区藤棚町 2-197

時代の分岐点を掘り下げる

神奈川新聞記者 兼 論説委員 成田 洋樹

県民図書室を初めて訪れたのは、30代前半だった2007年の秋口だったと記憶している。県行政や議会を担当していた時期で、同居する教育研究所が「高校と格差」をテーマに行った調査についての取材が目的だった。地下1階の一室に入ると、壁面の書棚にぎっしりと並ぶ教育関連書籍が視界に入ってきた。右側のスペースには神奈川の高校教育に関する資料なども収められているという。公立図書館とは別にこれほどの書籍と資料が集まり、貸し出しも行っている「穴場」があるなんて、と正直驚いた。

当時、家庭の経済力が進学先や将来の生活を左右する「格差社会」の問題が顕在化していた。教育研究所が県への情報公開請求で入手した県立高校の資料を基に分析したところ、授業料が免除される困窮世帯は、さまざまな困難と向き合う生徒が少なくない「課題集中校」に多いことが分かった。教育社会学者の荻谷剛彦氏が「階層化日本と教育危機」（2001年）で警鐘を鳴らしていたが、格差社会の影響を受けた高校の実態をデータで裏付ける調査は貴重だった。記事は1面トップに掲載され、現場の苦境に迫った連載「崩れゆく均等 『格差』の中の県立高校」（計5回）にもつながった。県民図書室と教育研究所に出合ってからおよそ20年。体調不良や異動で足が遠のいた時期もあったが、視野を広げる場であり続けている。

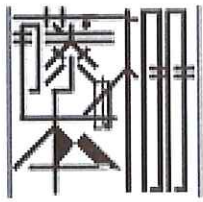
子どもの頃を振り返れば、学校の図書館との関わりは乏しかった。小学生の頃は利用する機会はあったが、中学、高校となると訪問した記憶すらない。部活動で忙しくなった影響もあるが、「国語」が大の苦手だったことが足を遠ざけたのだろう。本を読む習慣はなく、文章を読むのも書くのも苦痛だった。今でこそ文筆を

なりわいとし、社説を書く論説委員にも就いていることが不思議でならない。

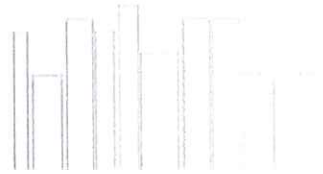
ようやく文章に向き合い始めたのは、大学受験のための浪人中に予備校に通うようになってからだ。苦手意識を払拭するために現代文の授業で評論を読み込むようになり、ともに戦後を代表する思想史家の藤田省三氏、政治学者の丸山眞男氏らを知った。両氏の著作集は学生には高価で手が届かず、社会人になってからそろえることができた。読み通せているわけではないが、今でも折に触れて手にする。藤田氏の著作集第6巻の「全体主義の時代経験」に収められた『安楽』への全体主義 充実を取戻すべく（1985年）もその一つだ。物事や他者との対峙を通じて経験を重ねることの重要性を説く藤田氏はこう指摘する。〈かつての軍国主義は異なった文化社会の人々を一掃殲滅することに何の躊躇も示さなかった。そして高度成長を遂げ終えた今日の私的「安楽」主義は不快をもたらす物全てに対して無差別な一掃殲滅の行われることを期待して止まない〉

高市早苗首相による突然の衆院解散から2026年2月に行われた総選挙で、自民党が歴史的な圧勝を遂げた。相模原市緑区の県立知的障害者施設「津久井やまゆり園」で、元園職員が障害者への差別意識を膨らませて引き起こした殺傷事件から今年7月で10年がたつ。政治があおる形で排外主義が社会に広がり、凄惨な事件を経ても障害者差別の根絶は進まない。戦中と戦後の全体主義への警鐘を鳴らし続けた藤田氏の文章がより切実に響く。

（なりた・ひろき）



ふじだなの
ほんだなから
Fujidana No Honodana



「高総検」(高校教育問題総合検討委員会)の経緯

はじめに

1975年に神高教の組織内に設置された「高校教育問題総合検討委員会」(以下高総検)の第1期から第11期までの報告資料のすべてが県民図書室に保存され、デジタル化されている。

高総検が発足した当時の神奈川の教育事情について「神高教50年史」に次のように記されている。「1960年に65%であった県高校進学率は、1970年には90%台に達し、学校建設はもとより、教育制度、教育内容、学習環境などあらゆる角度からの研究検討と改革改善のための立案及びその速やかな実践が求められた。」

そのような情勢を踏まえ、神高教は75年3月に高総検を発足させた。一方、県教委は同じ時期に学識経験者などのメンバーで「後期中等教育研究協議会」を設置し、検討を開始した。この研究協議会に神高教は当時の小室副委員長をメンバーとして送り、高総検の検討成果を県の施策に反映させるように努めた。

1期 高総検検報告Ⅰ「神奈川の高校教育改革をめざして」

発足から2年余35回の討議を踏まえ77年6月に最終報告を出した。その内容は「学区制・入学者選抜制度・男女共学について」「職業教育について」「『百校計画』と過大校問題について」の3点で、最終報告までに全組合員の討議のために「活動報告Ⅰ・Ⅱ」を発刊した。

2期 高総検検報告Ⅱ「神奈川の高校教育改革をめざして」

「教育課程」を中心に進めた第2期高総検は、3年余57回の討議を踏まえ80年10月に最終報告を発刊している。その内容は78年に文部省(当時)が告示した「高等学校新学習指導要領」に対応して82年から各学校で実施する「新教育課程」の編成についての課題だった。他に「学区制・入学選抜制・男女共学・大学入試」があった。

3期 高総検検報告Ⅲ「神奈川の高校教育改革をめざして」

1年に17校が開校するといった「百校計画」が進行している時期に、2年間の討議を経て83年3月に報告書を出した。その内容は「『百校計画』とその後の長期展望」「『特色ある高校』批判」「あるべき高校像と職業・技術・労働教育」の3点だった。

4期 高総検検報告Ⅳ「神奈川の高校教育改革をめざして」

86年4月、臨教審の第2次答申が出され、それを批判する「臨教審中間まとめ」を途中で発刊するなどして、3年間の討議を踏まえ86年6月に最終答申を発刊した。その内容は「新設校における学校づくり」「高校生論」「教育政策と神奈川教育計画」だった。

5期 高総検検報告Ⅴ「神奈川の高校教育改革をめざして」

86年8月に発足した第5期高総検は神高教組織内の生活指導対策会議とPTA対策会議を包含し、①教育条件、②学区・入選、③教育課程、④職業教育、⑤生活指導、⑥進路指導、⑦PTAの7つのグループに編成し、1年10ヶ月合計124回のグループ会議で検討を重ねた。また、高校中退者の増加への対応として、87年10月に「中途退学者プロジェクトチーム」が発足し、本報告(第3分冊)と同時に緊急提言として「中途退学者を出さないために」を発刊した。

6期 高総検検報告Ⅵ「神奈川の高校教育改革をめざして」

第5期高総検の7グループを6グループに再編成し、生徒急減期を各グループの共通課題として検討した。その課題とは教育課程、空き教室利用、教員定数に関わる問題等であった。また、89年4月の学習指導要領の全面改訂に先駆けて88年12月に「新教育課程プロジェクトチーム」が発足し、さらに、「神奈川県個人情報保護条例」が90年10月1日に施行されたことに伴い、学校現場の問題を検討するため90年9月に「個人情報保護条例プロジェクトチーム」が発足、「“個人情報保護条例”って何？」を発刊した。

7期 高総検報告Ⅶ「神奈川の高校教育改革をめざして」

90年6月に発足した7期高総検は5期・6期に続いて6グループを基本に検討した。それまでのPTAグループを「PTAと子どもの権利条約」に変更している。7期の検討中に県教委から「新構想高校」いわゆる「単位制高校」が抜き打ち的に発表された。教育課程グループが特別定時制対策会議とともに「単位制高校対策会議」を組織し、本部執行部とともに県教委交渉を重ねている。最終報告書の内容は『課題集中校』問題「高校教育の多様化」「生涯学習」の3点、他に別冊として「急減期の教育改革」を発刊した。

8期 高総検報告Ⅷ「神奈川の高校教育改革をめざして」

93年4月、「教育課程」「学区入選」「教育条件」の3グループが発足し、3分冊で報告した。各グループによって「新多様化・総合学科・新学力観」「こうして神奈川の高校入選は改変された」「保護者のフトコロをアテにしない学校運営」が発刊された。また、新たな委員会として「子どもの権利検討委員会」「部活動問題検討会」を発足させた。

9期 高総検報告Ⅸ「神奈川の高校教育改革をめざして」

91年11月に県教委はア・テスト体制の改変等を含めての検討機関「高課研」を設置した。この時期に発足した9期高総検は入試制度を中心に検討を行い、98年4月に最終報告を発刊した。その内容は「新入試制度は何をもたらしたのか～『新神奈川方式』を検証する～」であった。

10期 高総検報告Ⅹ「神奈川の高校教育改革をめざして」

99年、県教委は生徒急減期を見据え「県立高校改革推進計画」を発表した。そのような中で発足した第10期高総検は、「高校教育のゆくえ」と題する最終報告を発刊した。その内容は、第I部「教育政策の動向」、第II部「県立高校将来構想答申と県立高校改革推進計画の分析」、第III部「改訂学習指導要領をのりこえる」だった。

11期 高総検報告Ⅺ「神奈川の高校教育改革をめざして」

Ⅺ期高総検は5グループで検討することとし、従来の事務局体制から各グループから1名ずつの運営委員会を確立することにした。最終報告は「教育政策の動向」「『タテ・ヨコのカリキュラム』による教育課程の自主編成」「学区・入選の変更の動き」「教育条件・高校再編」の4課題だった。他に別冊「これからの職業教育について」を発刊した。

なお、高総検は2003年3月の11期高総検報告が最後になっているが、全組合員配布の「高総検レポート」は2009年3月まで発刊していた。「高総検レポートタイトル一覧」で確認できる。

(資料委員会 中野渡強志)

NO	発刊名	発行
1	活動報告(Ⅰ) 1975.3/15~9/27	1975.11
2	活動報告(Ⅱ) 1975.10/13~1976.5/29	1976.7
3	高総検報告Ⅰ「神奈川の高校教育改革をめざして」	1977.6
4	活動報告(Ⅲ) 1977.6/15~1978.4-15	1978.6
ん	第4回高校教育問題討議集会・討議用資料 「新高等学校学習指導要領」批判	1979.9
6	学区・入選制度を改革し高校増設を進め受験競争をなくそう	1979.9
7	第5回高校教育問題討議集会のまとめ 1980.10.05	1980.12
8	高総研報告Ⅱ 神奈川の高校教育改革をめざして	1980.10
9	第6回高校教育問題討議集会次第・資料 1981.10.16	1981.1
10	高総検報告Ⅲ 神奈川の高校教育改革をめざして	1983.3
11	第Ⅳ期高総検 臨教審中間まとめ	1985.3
12	高総研報告Ⅳ 神奈川の高校教育改革をめざして	1986.6
13	第Ⅴ期高総検中間まとめ 神奈川の高校教育改革をめざして	1987.11
14	高総検報告Ⅷ第1分冊「新多様化 総合学科 新学力観」	1988.6
15	高総検報告Ⅷ第2分冊「こうして神奈川の高校入選は改変された」	1988.6
16	高総検報告Ⅴ 神奈川の高校改革「それぞれ自前の教育課程改革を」	1988.6
17	中途退学者を出さないために	1988.6
18	生徒急減期は教育条件改善の絶好機だ!	1989.10
19	改訂学習指導要領を批判し神奈川における教育課程改革を展望しよう	1989.10
20	高総検報告Ⅵ 神奈川の高校教育改革をめざして	1990.11
21	コース制を考える	1990.11
22	"個人情報保護条例"って何?	1990.11
23	学習疎外を超えて	1991.6
24	中途退学者を出さないために 増補版	1991.2
25	高総検報告Ⅶ 神奈川の高校教育改革をめざして	1993.1
26	高総検報告Ⅶ別冊「急減期の教育改革」	1993.1
27	「知っていますか?」「専門コース制」の問題点	1994.3
28	高総検報告Ⅷ第1分冊「新多様化 総合学科 新学力観」	1995.2
29	高総検報告Ⅷ第2分冊「こうして神奈川の高校入選は改変された」	1995.4
30	高総検報告Ⅷ第3分冊「保護者のフトコロをアテにしない学校運営へ」	1995.12
31	高総検報告Ⅸ 神奈川の高校教育改革をめざして	1997.12
32	『新学習指導要領』分析	1999.7
33	高総研報告Ⅹ 神奈川の高校教育改革をめざして	2000.1
34	職業教育を考える	2000.5
35	第Ⅺ期高総検報告別冊「これからの職業教育について」	2002.12
36	高総検報告Ⅺ 神奈川の高校教育改革をめざして	2003.3
37	高総検レポート No.01(1987.5)~No.92(2009.3)	
38	高総検レポート タイトル一覧	

宇於崎 愛

前任者からの引継ぎ資料にあった忘れられないひと言がある。「わざわざ公共図書館に行かなくても、せっかく毎日来るところにあるんだから毎日来なきゃもったいないじゃない?」と。芥川・直木賞や本屋大賞など受賞した小説は公共図書館だとあつという間に予約で1年以上待ちとなってしまうが、本校だと待っても1か月程度。公共図書館と違い、学校図書館はそこに通う生徒・職員が利用者のため人気の書籍もすぐに順番が回ってくる。

予約・リクエストも気軽にしてもらえるよう、コロナ禍を機に Google フォームを使い館外でもリクエストを受け付けられるようにした。今では、書店で読みたい本を見つけた生徒がそのままフォームで申し込んだりしている。わざわざ図書館まで来なくてもリクエストができるため、手慣れた生徒はしょっちゅうフォームでリクエストをしてくる。

「毎日行ける図書館」なので、選書から小物まで毎日来ても飽きられないような空間づくりを心掛けている。実は私自身は高校時代に学校図書館を利用したことがなく、着任当初、いわゆる学校図書館が高校生にどのように使われている場所なのか想像できず、図書委員に頼りながら前任者から引き継いだことを継

続して図書館を運営していた。生徒や教職員とコミュニケーションを取っていくうちに、だんだんと自分なりの図書館づくりができるようになり、今では本校の生徒は“図書館に来たら本を読まなければいけない”という固定観念が薄れつつあるように感じる。それでも、頻繁に図書館に足を運んでいる生徒が「こんなのあったんだ! 知らなかった」と言っているのを聞くと、まだまだ宣伝が足りないなと奮起している。

生徒にとって毎日でも行きたくなる図書館とはどんな所か……模索する毎日は楽しい。

(うおざき めぐみ 横浜南陵高等学校 学校司書)



新着案内

■『神奈川の「戦後 80 年」過去から未来へ』 鈴木晶・小川輝光・藤田賀久編著 えにし書房 2025

戦後 80 年。この節目に、神奈川の歴史を通して、何を受け継ぎどう未来へつなげていくのかを見つめ直す一冊。教育関係者のほか、独自の実践にとりくんできた 30 人を超える方々が執筆しています。新たな「戦後」が生じないために、学校現場で平和学習に活用していただきたい本です。

■『学校の男性性を問う 教室のあたりまえをほぐす理論と実践』教育科学研究会編著 旬報社 2025

この本は、学校が一見「男女平等」に見えても、実際には「男性性」が基準になっていることが多いこと指摘している。単なる批判にとどまらず、教師や生徒の日常の言動、制服、部活動といった具体的な場面を通して、それをあたりまえに受け入れてはいないか、読み手に問いかけている。ジェンダー平等をめざす社会において、教育の場から変革を始める必要があるのではないのでしょうか。

■『入門高校生のための金融リテラシー図鑑』 泉美智子監修 学事出版 2024

2022 年度から、金融教育が義務化されました。この本は、これから進学、就職する高校生に向けて、社会人になる前に身につけておきたい知識をわかりやすく図解にしてまとめています。金融教育を学校で受けてこなかった大人にもおすすめします。